2021年 秋号
No.15

市美だより

鹿児島市立美術館 | KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART

発行 鹿児島市立美術館
〒892-0853
鹿児島市城山町４番36号
TEL(099)224-3400

美術館HP

あなたとわくわく
マグマシティ
鹿児島市

展覧会の会期等はすべて、新型コロナウイルス感染症の地域の感染状況により変更になる場合があります。詳しくは美術館ホームページでご確認ください。

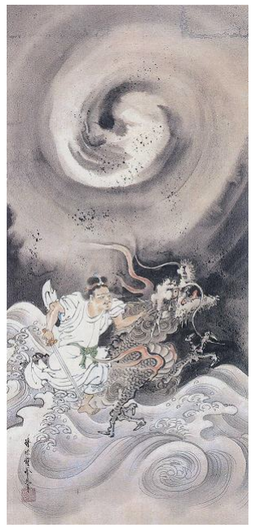
無料開放日のお知らせ

毎月第３日曜日は、小・中学生は無料開放日です。所蔵作品展 ＋ 小企画展を無料で鑑賞いただけます。１０月１７日（日）、１１月２１日（日）、１２月１９日（日）…

小林養建『騎龍人物図』

龍に跨り、剣を右手に、荒れ狂う波間から天空へと飛び出す人物が描かれる『騎龍人物図』は、幕末から明治初頭頃、小林養建（1815-1876）によって描かれました。作中の人物は、ヤマタノオロチという８つの頭をもつ怪物を退治し、食べられてしまう運命だった方クシナダヒメを助ける日本神話の神の一人、スサノオと思われます。

養建は、はじめ薩摩で馬場伊歳に学び、その後、室町時代から約400年もの間続いた画派である狩野派の一つ、木挽町狩野家の晴川院養信のもとで学びます。本作は、狩野派の絵師、狩野時信（1642－1678）作『素戔嗚神』と類似していることから、狩野派に伝わる画題の一つであった方可能性があります。波頭のフォルム、天空へ躍り出る龍の表現など、狩野派の伝統を生かしながらも、薩摩の絵師らしい力強さも感じられる作風となっています。


小林養建《騎龍人物図》

いよいよ開幕！

FROM THE EDGE

10.14THU–11.7SUN

フロム・ジ・エッジ
―80年代鹿児島生まれの作家たち

篠原愛《Symbiosis 2020-21》2021年

秋の特別企画展「フロム・ジ・エッジ ― 80年代鹿児島生まれの作家たち」がいよいよ10月14日（木）に開幕します。

1980年代の鹿児島に生まれた、表現方法の異なる７人の現代作家による展覧会です。

現代美術家の髙橋賢悟さんは、溶かした金属を鋳型に流し込んで作品を制作します。その金属の厚さはわずか0.1ｍｍ！版画の芳木麻里絵さんは、シルクスクリーン（版画の一種類の孔版）の技法を使って幾重にも刷り重ね方厚みのある作品を生み出します。油彩の篠原愛さんは、可愛らしいものと人間の本能を刺激するモチーフによって、少女の内面世界が絵の中で混ざり合った方美しい異形を生み出します。水彩の宮内裕賀さんは、イカをモチーフにするだけでなく、イカを画材に加工して作品を制作しています。インスタレーションの今和泉隆行さんは、日本のどこにもない中村市の地図を1997年から描きはじめ、未知の地域のリアリティを想像する体験をインスタレーション（空間全体で体験する）で表現しています。木彫の七搦綾乃さんは、作品のモチーフとしてよく扱う自然物が変化していく時間を、木彫やドローイング（線画）で表現します。ドローイングの篠崎理一郎さんは、自身の内面や日常風景を線画を軸に表現しています。

30代の若き感性による新方な表現を鑑賞し、今という時代を体感してみませんか。

自分が通っている学校が市立美術館の「特割制度」に申し込んでいるとお得な料金で鑑賞できます。来館前に学校の先生に尋ねてみてくださいね。

秋の所蔵品展（西洋美術＋郷土作家＋特集コーナー）

特集：没後100年橋口五葉③―転機となった方旅―新方な美との出会い

会期：１０月１２日（火）～１２月１９日（日）

常設展示室では、秋の所蔵品展として、印象派から現代までの西洋美術と郷土作家を中心とした近代以降の日本美術の所蔵品をご紹介しています。特集コーナーでは、今年、生誕140年／没後100年を迎える郷土出身の橋口五葉の画業をご紹介するシリーズの３回目です。画業の転換点となった旅を起点に、旅で出会ったモチーフを描いた作品群と、同時期に試みた装飾的な日本画を展示します。後に木版画という五葉芸術の新境地を拓くことにつながる旅をめぐる作品の数々をお楽しみください。

橋口五葉《耶馬渓に泰山木》1912　墨、水彩、絹